

## ポジティブサポートの世界(2)

# 〈その人中心〉という意味を考える

村田 愛

ポジティブサポートは、障碍をもつ人のために生まれたものです。しかし、障碍だけに焦点をあててその人のことや将来を考えていくものではありません。ポジティブサポートは、「その人」に焦点をあて、建設的に現在から将来を考えて行く作業です。人は多面的であり、その人の多面性や可能性／現実を見てみるこ

とが、まず大切な一歩だと考えます。ポジティブサポートは、その人が「その人らしく生きる」ことを目指すものです。つまり人として「自分が、あるいは、誰かが生きる」ということを考える人であれば、必ず通じるものがあると信じています。そしてなんらかの形で、ポジティブサポートの根幹を感じていただけれ

ばと思います。

### 言葉が差別？

私がアメリカで特殊教育を勉強していた頃、言葉に気をつけることの重要性について社会の関心も高く「言葉」自体が何かと話題にのぼっていました。特に差別にあたるような言葉については、いつも議論され使われる表現が変わり続けています。(色々な人種や様々な言葉を話す人がたくさんいるアメリカだからこそ、言葉の持つ意味やその使い方も世の中の状況に応じて変化して来たのだと思います。)

たとえば、Handicapは、差別語であるとして使われなくなっていました。そして、Disabled Person(障害者)という言葉もその人の持っている障害だけに焦点がいてしまう言葉で、その人の持っている人間性が見えないのはおかしいと言うことになりました。一九九〇年代には、まず大切にするべきことは「その人

The Person」というのが主流になりました。だから、表現も「人」が最初に来て、そして、その人が障碍を持っているという「The Person With Disability」という表現が使われるようになりました。

その頃はまだ、私自身、言葉や表現が変わるのも大切だけれど、繊細になり過ぎ「言葉だけ」に気を使うのは如何なものかと漠然と感じていました。それは、差別にあたる言葉を使わずに丁寧な「正しい」言葉を使っている人と話していても、内容的に差別的な感覚を覚えることもあったからです。また、それと同時に、知っていて「無意識に」使ってしまう言葉によって人を傷つけるのは、確かにいけないことだと、「繊細」になることの必要性を肯定していました。使う言葉／表現は、必然的にその人がどの様に「自分」、そして「その言葉」の意味を捉えているかを示すからです。

## 私の障害はあなたです

大学院に通っている頃、『私の障害はあなたです』というキャンペーンポスターに出会いました。それは、教授の部屋の壁に貼ってあったポスターでした。その時は、私自身も「誰かの障害」になり得ることに驚き震える感覚を覚えました。その時のキャンペーンポスターでその言葉『障害』という言葉を使っていたのは、障害のある人でした。その時どきとしたのは、障害自体が「障害」なのではなく、「人」が障害という、そこに訴えられている意味にでした。

何をもって「障害」といえるのか。そして、それと対照的にあるような、「普通」とは、何を持って言えるのか。それらを考えていた私にとってのテーマを、『私の障害はあなたです』と短い言葉で、改めて投げかけられたのでした。漠然と概念的に考えていた時に、その「障害」という言葉と、「あなた」という言

葉を目の当たりにし、よ  
りいつそう自分の問題に  
なったのです。そして、

そこには、訴えている人

が見える。だからこそ、より新鮮であり重く強く響くような感じでした。そして、不思議な気持ちよさもあったのでした。「言葉だけ」に気を使うことにちよつとした違和感を感じていたのが、このポスター『私の障害はあなたです』に出会い、私の中で「何が違和感を感じさせていたのか」が、形になったような気がしました。

## 人が障害？

問題は、使う言葉や表現だけではなく、私が誰かの障害になり得るということであり、あなたが誰かの障害になり得るということです。

わたし自身も誰かの「障害」になるとしたら、どう



いうことなのか。

何が「障害」になるのか。

誰でも誰かの「障害」になる危険性があるような気がするのにはなぜなのだろうか。

これらを考えることが私にとっては大事なことでした。

あるテレビ番組で、障害のある人の生活をドキュメントタッチでみせた番組の中で、彼女は「自分の手足の身体的な障害は、現在の技術と工夫で乗り越えて自分らしく生活している」と嬉しそうに言っていました。一人暮らしをしていて、お料理する時、足で包丁を器用に使いこなしていました。彼女が運転できるように改良された車を運転し、出かけている姿も映っていました。しかし、彼女は『私は障害を毎日感じる。問題は実際の私の障害ではない。私の障害は、「心がバリアフリーでない」ことなんだ』という意味のこと

を言っていたのです。

### 心のバリアフリー？

ここで使われている「障害」を考えてみると、まず思い浮かぶのが、「生きづらさ」です。では、どういう時に、「生きづらさ」を感じるのでしょうか。「生きづらさ」は、自分が自分を肯定できない時や、まわりの方が自分を肯定していない／否定しているように感じる時に、重くのしかかって感じるもののような気がします。そして、それは、自分が大切にしたいことが脅かされている時とも言えると思います。

人は、人をも価値付けようとしたりします。人を自分の安心感のためにファイリングすることもありません。そうすることで「その人」を理解したと思ってしまう傾向があると感じます。むしろ、そうすることで「その人」を理解できないことが、肯定できる場合も

あるのでしょうか。それは脅かされないように、自分を  
守る為に本能的にしてしまう行為かもしれません。し  
かし、価値付けることも、自分の安心感のためにファ  
イリングする行為も、人／相手を傷つける危険性があ  
ります。そしてそれらの行為は、自分と相手との関係  
性や可能性を殺してしまうこわさがあるのです。現実  
の「その人」の姿がみえなくなり、「その人」への理  
解のさまざまなになるからです。

### 障害になり得るものは、わたし／あなたの価値観？

障害になり得るものは、人が無関心であることや、  
思い込みや固定観念をもって「十分知っている」と  
思ってしまうこと。わかっているつもりになって、一  
面的にしか見えないことなのかもしれません。

それは、わたし／あなたの作った壁であり、枠であ  
り、心のバリアーでしょう。短絡的にその人を自分の  
概念の中で決めつけてしまったら、その人は心を閉ざ

してしまおうでしょう。決

めつけられたから「心を

閉ざす」ことで、心のバ

リアーを作るのでしょ

う。それと同時に、決めつけてしまう行為が、もうす

でにこちら側のつくったバリアーとも言えると思いま

す。

また、「障害」は、「わからない」と突き放されたよ  
うに感じることも、でもあるかもしれません。しかし、  
問題は知る必要のないこととして、自分から遠ざけて  
しまうことで誰かを傷つけることです。そこで重要に  
なるのは、想像力です。

このように考えると、障害は障碍をもつ人だけが  
知っている感覚ではないと思います。生きている人々  
がなんらかの形で「生きづらさ」であったり、「自分  
らしさ」を否定されているように感じたことがあるの  
ではないでしょうか。障碍をもっている人が弱者であ



り、「普通」と言われる人が守るべき対象ではないのです。生きている私たちすべてが「生きづらさ」「障害」を持ちうるのです。

反対に、まわりの人に自分らしさを認められ、自分の気持ち尊重され、他の誰でもない一人の人間として肯定的に関心をもたれる時、どんなにか自分が自分らしく生きることが誇らしく思えるでしょう。そういう場と時間を作り出すのが、ポジティブサポートなのです。ここで、ポジティブサポートの生まれた背景についてご紹介しましょう。

### ポジティブサポートの生まれた背景

D・r・ベスIIマウントが、私の大学でのクラスにゲストスピーカーとして来ました。彼女が特殊教育に感じていた疑問やポジティブサポートを完成させるまでの経緯を実体験で話してくれました。

ポジティブサポートは、一九八七年ベスIIマウント

が博士号の論文としてまとめたものです。彼女には、障害を持ったきょうだいがいました。そこで、彼女はまず、「専門家」と呼ばれる人に疑問を持ちます。ベスIIマウントのお母さんが出会った専門家たちはなんらかの概念をもとにその息子の可能性や将来を語る場にあり一方的に「告げられる」「感覚を覚えたようでした。意見の尊重などという概念が存在しないように感じたそうです。

彼女のお母さんは、息子のミーティングに呼ばれる度に、ミーティングのあり方に不満を感じていたようです。「なぜ母親の発言権も保証されていないように感じる形でミーティングが行なわれるのだろうか」。

そのミーティングに息子本人が呼ばれることはありませんでした。「なぜ、息子の将来を考える場に、本人が呼ばれないのか」。出席者は息子に学校で関わっている先生や専門家とお母さんだけでした。しかし、子どもも成長するにつれて、自分の為に自分で主張した

い気持ちが強くなるでしょう。「息子の将来を考える時に、なぜその子どもに聞いてくれないのだろうか」。誰にでも、様々な関係性があります。そして、家族の思いも別々に存在します。「彼の多面性を考えれば、彼に関わる人たち全てが、専門家と呼べるのではないか」。

そして、ポジティブサポートを形にしていくなかで、彼女は専門分野を一つに絞るのではなく、哲学、心理学、社会学、コミュニケーションなどのいいところをミックスしたら、それぞれの「人の多面性」、「その人の生活／現実」をより理解できるのではないかと考えました。それらの専門家を集めて、それぞれの専門性を生かしつつ、完成したのがポジティブサポートのセッションのあり方です。

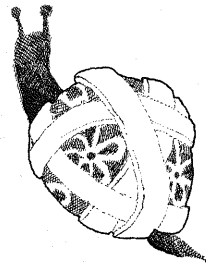
### ポジティブサポートが大切にしていること

ポジティブサポートは、「その人らしく生きる」こ

とを目指すものとして生まれたいものです。誰もが、自分らしく生きたいと願っているでしょう。

可能性を追求し、視野を狭くすることなく多面的に物事を見る力が、「その人らしく」生きることを考えることを可能にします。人間は多面的で多様な可能性を持っています。それを何かに限定することは、他の可能性を見落とすことだし、多様な可能性を持つ「その人」を否定することになってしまうのです。

ポジティブサポートは、「その人」に焦点をあて、その人の現実から出発するものです。それは、その人をもつ多様な関係性と切り離すことはできません。なぜなら「その人らしく生きる」ということを考えることは、まず、その人がどういう人か、全体像、多様性を描き出すことだからです。そして、建設的に現在か



ら将来を考えて行く作業だからです。

ポジティブサポートは、参加者全員が尊重される場です。他の人が「その人」を価値付けたり、なんらかの評価を下すものではありません。ひとり一人が、それぞれ尊重されます。

この考え方は、障碍の有無に関わらず生きている私たちすべてが「自分らしく」生きるために重要なものなのです。ポジティブサポートがもつ可能性が、誰かの可能性に影響を及ぼしていると思うのです。

今まで述べたように、人は関わりの中で生きているからこそ、人の表現の仕方・理解の仕方・関心の向け方／関わりの持ち方が、人の生きやすさ／生きづらさに影響を及ぼしています。人と出会った時に無意識の内にバリアを作ってしまうこと、自分が誰かの障害になり得るということに意識を向けてみるのが、社会の中で生きている誰にも必要な作業のような気がします。ポジティブサポートは、人を理解するというこ

との奥深さと、自分の中での変化に目をむけるということ、そして、想像力ゆたかに建設的に考えることの重要性を気付かせてくれました。これらは、重要な発想の転換でした。

人間として肯定的に関心をもたれることで、自分が尊重され、「自分らしさ」を認められる感覚を持つのでしょうか。その時に、「自分らしく」生きることが誇らしく思え、生きることの意味を見出せると思います。

それぞれ皆「自分らしく」生きるということが、大切だと考えています。

(ポジティブサポート研究室主宰)